



TITLE:

ケネー學説における政策的背景(一) - ケネー學説研究への序説 - (社會經濟史特集)

AUTHOR(S):

菱山, 泉

CITATION:

菱山, 泉. ケネー學説における政策的背景(一) - ケネー學説研究への序説
- (社會經濟史特集). 經濟論叢 1952, 69(3-4): 140-156

ISSUE DATE:

1952-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/132249>

RIGHT:

京都大學經濟學會
經濟論叢

第六十九卷 第三・四號

《社會經濟史特集》

ヤスパースの歴史意識……………出口 勇 藏

フォイエルバッハと市民革命（一）……………平 井 俊 彦

ケネー學說における政策的背景（一）……………菱 山 泉

プロシヤ農業變革についての一考察……………山 口 和 男

伏見酒造業の發達……………井 上 洋 一 郎

クリストファー・ヒル編

『イギリス革命——一六四〇年』……………河 野 健 二

昭和二十七年三月

ケネー學說における政策的背景 (一)

ケネー學說研究への序説

菱 山 泉

一 ケネー學說の一般的性格

フイジネグアトは、これらの學說をさし示すのに、誇らしげに『經濟科學』(science économique)と云う言葉を用了。經濟學體系の創設を刻印している此の言葉の含意について、A・オンテンは「そこでは單に一つの個別科學が問題にされたのではなくして、經濟の基礎の上に構成された世界觀が問題にされた」(傍點筆者)といつたのである。

(1) A. Oncken, Geschichte der Nationalökonomie, Teil I, 1922. SS. 329—340

なおシュムパーターも、これに關して「それは單純なる經濟學ではなくて、經濟的な礎石よりなり立ち且つ經濟的要因を前面に押出している『般的社會學』」と云つた。中山・東畑譯『經濟學史』六七頁、J. Schumpeter, Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte, G. D. S., I—1, 1924. S. 41.

いうまでもなくケネーは、いわゆるアンシャン・レジームの諸矛盾が露顯し、人々が間近に忍びよる變革の楚吾に耳をそばだてながら眼まぐるしい變動のカオスのなかに危機の萌芽を摸索していたときに、政治經濟の問題に心を碎いたのであつた。まことに、健康にひたつた多くの人々にとつては、人體の正常なる機能や運行は、分

析されないままに殆んど自明のこととして認容され、そこにはかれらの意識の平靜さを擾亂する何ものも見出されないものである。しかし、ひとたび病禍にみまわれ、それらの人體の諸機能の運行に支障をきたすやいなや、人々は生理學的問題に眼をくばりはじめる、いな少くともその問題の重要性を示唆せられるものである。これと同じく、ものうい歴史の営みが萬人の視野に正常的なものとして映り、人々が半ば慣習的になつた生活の軌道を墨守しているようなときに、歴史の表皮をかたどるみせかけの正常圏の背後に非正常圏の存在を嗅ぎつけたり、人々の意識を自明的なものとして拘束するところの・感情に支配された硬直的な觀念體系に鋭利な批判のメスをふるい、さらに人間の存在・その歴史的生成・社會の體制そのものに眞向から問題を投げかけたりすることは、ごく少數の人々にして始めてよくなしうるところである。

- (1) 「われわれの處には、反君主制的な自由政府を謳歌する哲學の風がふきこんでくる。それは人々の中に入つてゆく、……おそらく革命が、想像するほどの異議にもあわずに、起るであらう。というより、それは歡呼のうちにおこなわれるであらう」——一七五七年におけるダルジャンソンの言葉 (H. Taine, *Les origines de La France contemporaine*, II, t. 2^e, pp. 145—146) 「あなた (ミラボー) のこの前の手紙には、個人の努力が非常に空しいものだと言ひかけています。しかし、そんなことで氣をひるませることは禁物です、というのは、きつと怖しい危機がやつてくるでしょうから。そして、そのときこそ醫學の知識を活用せねばなりませんまい」——ケネーのミラボー宛の手紙 (G. Schelle, *Quésnay et le Tableau économique*, R. E. P., 1905, pp. 520—521)

しかしながら、變動期においてはそうではない、變革はめまぐるしい速さで歴史の外装を引きちぎり萬象を裸にしてしまう。かくて、そこではあらゆるものが、すなわち今まで絶對的にして不可侵だとされたものや永遠にわたつて不動にみえたものまでもが、悉く批判の祭壇にひきあげられる。多くの人々はそれまで自明のこととし

ていた觀念・慣習の體系に遲まきながら疑惑の眼をむけ、歴史的存在的の背後にうごめく根源的なものを探究しはじめ、無數の傷痕に麻痺した政治體の中に正常的な生命の營みを發見しようとする。そこでは、かのデカルトによつて發せられた「われ」の自意識に透徹された批判の言葉は、こんどは歴史や社會にたいして眞向から發せられるのである。かかる世界のただ中で「（ソクラテスによつて天上からひきおろされた）モラルを地上にめばえさせる」ことを企圖したケネーが、現實の政治經濟の問題を提出し、これを體系化するにあつて、歴史的存在にたいする奥深い洞察によつてそれを基礎づけたことは、あえてあやしむに足りない。この意味からすれば、經濟現象に關するかれの考察を導いたものは、具體的な人間存在にたいする包括的な直觀であつたともいふであらう。

(1) Marquis de Mirabeau, *Éloge funèbre de M. F. Quesnay*, *Œuvres* P. 8. 「ケネー全集」第一卷、三八—三九頁

ところで、一コの學說體系の形式的な價值は「それが開花せしめる觀念の多樣性とそれが收斂される原理の單一性によつてはかられる」といえるであらう。まことに、一つの學說の產出する觀念の豊かさは、まず人々の心意を惹きつけずにはおかない、というのは、觀念というものはわれわれにとつて最も身近にみえるものであり、また日常の言葉に容易に定式化されうるものでもあり、そのうえ誰れの目にもさだかな諸要素に分解しうるものでもあるから。しかし、人々がこの觀念の多樣性を細かく分析してゆくにづれて、それらが相互に融合し、浸透しあい、そして遂には不可分離的な直觀にとけこんでしまふさまに氣づくものである。そして、かような直觀のもつ豊かさは到底ひからびた概念によつては表明されえないし、またそれのもつ單一なヴィジョンは、いかに詳細にわたつたとしてもただ漸次的接近をしか意味しないところの分析の言葉をもつては、決して完全に

は把握しえないものである。

(1) H. Bergson, *Les Grands Philosophes* : Gabriel Tarde, Préface, P. 5.

以上に述べられたことこそまさにケネーの著作の外貌ににじみだたその二重性格なのである。それはまず細分された諸觀念の多様性と斬新性によつて人々を魅惑してしまふ。しかも、それはわれわれが關心をもつほとんどのすべての問題に言及している。政治・經濟はもとより道德・法制・心理・哲學といつた廣大な領域にわたつた重要問題が順次にケネーの巨大な胃腑に流入する。というよりはむしろ、それらの諸問題が一舉にケネーの頭腦をとらえたかにみえる。かくて、かれの銳利で柔軟なエスプリは、一つの問題から他の問題へ、一つの個別科學から他の個別科學へと自在に飛翔し、そこから湧出するものもろの觀念は相融合して一コの深遠なる有機的綜合を示している。しかしながら、かれの纖細にして洞察的な省察と多くの問題に與えたその巧妙なる解答を通して、現實にたいする或る一般的觀念がよこたわつており、この觀念自體の背後に單一なヴィジョンが透視されうるのである。

ギリシャ的世界の「イデア」の理念に類似した、永遠的法則に従つて劃時代的にただ一回限り發現すべきフィジークな歴史的遂移、その極に現勢化する永恒循環的な『本質的に安定的な秩序』——それが、ケネーによつて社會的現實の背後に洞察されたヴィジョンであつた。現實が一つの變動の弧をえがいて宿命的に破滅にむかう「キリスト教の終末觀、モンテスキューの變動説のごとき」のでもなく、またそれは彼方に展望された極にむかつて絶えざる進歩と上昇の途を辿る「テュルゴー、コンドルセー、コントの段階説、スミスの進歩主義のごとき」のでもなく、現實は轉落の危機をはらみつつも「理性的」人間の能動的適應によつて或る點にゆきつげば、そ

からは完全調和の實在として永恆的な靜的循環を持續してゆくべきものとされる。かくて、それは近代的な意味での動的な時間系列の否定のうえに、却つて靜的な永遠性の恢復を翹望したものとさえいう。しかしながら、かかる社會的現實にたいする彼れの概念に思ひをこらすにつれて、それが更に單純化されて現われるようにみえる。ケネーは、社會の内在的な本質・その始源的な狀態・その終極的な態様の解明にのみ専念したというよりはむしろ、經濟社會に内面的なフィジックな構造と自己更新過程をあきらかにしようとした。そこにこそ、ケネーにとつて本質的なものがあつたともいえよう。かれの全學說を支配したものは、經濟社會の構造的な法則性にたいする非常にオリジナルな見地なのである。

(1) 『經濟表』の世界は、そのフィジックな構圖であり、『中國の專制政治』は政治的な肉づけをなした場合のそれである。スミ
スにとつて中國社會は發展へと破られるべきであつたのに、ケネーにとつては、發展的完結の世界として映じた。十八世紀の
人々は、自分達の思想の性格をそれにしのばせながら、夫々相異なつた夢や惡夢を中國社會にたくしたのである。

(2) Cf. Ouden, *op. cit.*, SS. 340—341; Beer, *An Inquiry into Physiocracy*, 1839, P. 169.

かくして、社會經濟現象に對決するさいのケネーは、個々の賣手や買手、個別的な製造業者や商人等々といつた個別者の識域から超然とぬけて、高所から「國富の再生産」と「支出の分配的秩序」を總體的に、《de son *étendu*》考察する。現象を洞察するかれの眼は、企業家や商人のそれではなくして、「經濟的統治」の高峰に位した政策家の眼である。かれの研究視點は社會經濟の總體的現象の中樞に定着し、そこから、常人をしばしば幻惑しやすい錯雜した日常的諸現象の奥底に、事物の本質とその構造とを透視する。かくて、格調たかき彼れの理論體系の出發點は、經濟社會の個別的現象の觀察に餘りにも固執しすぎる個別者の思想ではない。そうではなくし

て、かれは、それらの個別的現象が無限の變様と反應を示しつつ全社會的範圍にわたつて描きだすところの・單一で規則的な運動を、それ自體客觀的なものとして直觀的に把握したもの『*domées immédiates*』から出發するのである。しかも、かれがこのように總體的經濟現象のえがく單一の構造法則を把握するにあたつて、單に受容的な直觀にもとづく對象のあらわな構圖にかたどつて、經驗的素材を綜合するというよりはむしろ、對象そのものを併呑しこれを自己の意想到應じて切解もしかねまじき意欲にみちた探求者として、對象の假相の背後にかくされた實在を一舉に洞察し、かかるアクティヴな直觀によつて捕捉された、埋もれた實在の構圖にかたどつて、錯雜した・いなむしろ顛倒さえした經驗的素材を截斷するのである。

かくして、混沌とした假象界の奥底に鋭く洞察された實在の構造 (*ordre naturelle*) とその法則とは、社會體制の基底的なものとなつたのであり、しかもかれがその下部構造的な根源として、フィジークな經濟的秩序とその法則を確定したことが、かれの斬新な特色となつたことはいうまでもない。しかしながら、かかる實在の構造すなわち「自然的」な經濟的秩序は單なる假説でも素朴な理想概念でもない、そうではなくして、——前世紀の物理的實在論者においてのように——歴史的時間をこえて普遍的にかつ絶對的に存立する實在として、把握されたのである。まさにその故にこそ、それは現存體制にたいする全き意味での理想的構圖として人々に政策的要請をせまると共に、現存體制にたいする確乎とした批判規準クリテリオンとなつたのである。まことに、ケネー學說にラディカルな性格を與えたものは、思想の外貌においてこれをみれば、かれに攝取された新興の實證的功利論者の思想ではなくして、却つて前世紀の實在論的な形而上學であつた。それとともに、——メイエのいつた言葉を少しもじつて使えば——かれの思想の素地、『*fonds indigène*』はあくまでフランスの「靜觀主義」的な哲學であつたことが注

意されねばならぬ。この意味において、「死者が生者を動かした」のであり、古い亡霊が新しい創造のために呼びおこされたといえよう。

(1) ケネーが若い時代に愛讀したものは、十八世紀の自然主義的哲學ではなくして、却つて古典哲學とデカルト主義の哲學とくにマールブランシュであつた。ケネーにたいする實證的功利論者とりわけロックの影響——『自然權』における社會狀態の推移、競争の利害調和と一般的福祉説——は否定しえないが、かれが經濟社會の生理的構造を一舉に洞察しこれに絶對的規範の意味をになわせた——この點にこそかれのラディカルな批判的性格がある——のは、思想自體の系譜からいえば、前世紀のフランス形而上學の影響である。ケネーにおける功利説は、この骨格の粘着劑であり、かれの自然構造觀——『自然秩序』の辭的構成にかんしてはトーマス・アキナスの、その動的推移に關してはブイフェンドルフとロックの影響を指摘したい——は、この骨格の素材であつたといえよう。なおかれにおける功利主義は、一面においては急進性を與えたといえ、他面においては妥協性をあたえていることは見のがせない。

しかし、ケネーの實在への透視は、かれにたいして不可抗的にせまってくる・堅牢な特殊具體的な歴史的表皮の抵抗をうけねばならなかつた。この強靱な壓力に抗する巨人の意慾も、その激烈なる葛藤から發出する實在概念も、現實の特殊な歴史形態の燒印をおされないわけにはゆかない。古い精靈が呼びさまされ、灼熱の現實のルツボに投入され、そこからひき出されるときには、新しい生命の刻印をおびる。若い時代の柔軟な胸奥に——おそらくは無關心な態度からだつたろうが——抱擁された思想は、かれの純粹な記憶に宿るのであるが、それは彼れの知らないまに發芽し生長し、ついに、かれが或る明白な意圖のもとに現實と對決する決戦の火花の中に——その火花の彩色をまといつてではあるが——收斂され開花する。されば、いまではわれわれの彼岸に憩つている・この發現した思想體系をば——その萌芽を出生地にまで尋ねてゆくのではなく——まさにみぎの現實との切點において把握し、飛び散る火花を通してその擔つている特殊な意味と實質的な性格とを究明すべき興味にから

れるのである。

かくみれば、この學說のもつ豊かなニミアンスは到底『世界觀』なごしは『社會哲學の試み』(A. Oncken, loc. cit., S. 340) あるごしは『一般社會學』(J. Schumpeter, op. cit., S. 41) といつた表現でつくされるものではない。端的にいえば、それは時代と環境を異にしたエトランジエーにまで、切々と訴え力強く迫る政策的基調をもつ。しかも一ゴの政策的體系としての此の學說は現實の具體的な「課題」の解明に收斂されたということ、そして、このこと自體を介して、それは廣い西歐世界に條件づけられた特殊なフランス的基盤に立つ。されば、ケネーが不可抗的な現實的要請にたいする政策的對決という基盤に立つていたればこそ、かえつて、その大膽な社會解剖と、政治體に對する構造的把握によつて、またその包括的な胃腑の中に併吞された、ゆたかな思想的素材を理論構成のための觀念的基體乃至媒劑とすることによつて、かの透徹した單純な體系を構成しえたのである。とはいへ、それは學說を政策的觀點から解きほぐそうとする研究者を、しばしば當惑させる矛盾した二重の性——それは理論そのものの單一性に較べて著しい特色をなすものであるが——をもつてあらわれさえるのである。

(1) C. M. チッヒアウエルは、明示してはいないが明らかにオンケン (Oncken, op. cit., S. 340) を對照せよを意識しながら「ケネーが自然的秩序の安定性と永遠性を強調したことによつて、そこに單にかれの時代と歴史の本質に對する理論的な見解やモンテスキューとヴァイコに對する對立思想だけを見るなら、それは正當な解釋といわれないであろう。經濟的な世界においては、この自然的秩序という言葉は頗る具體的な意味になつてゐる。」(傍點筆者)と示唆的にいふ。

C. Menck-Tibauer, François Quesnay als politischer Ökonom: Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde an Heibelberg, 1927, S. 7.

(2) この點については、オンケンもまた次のようにいいえたことは、指摘しておかねばならぬ。すなわち「熱意を以てするにも拘らず、一向にフィジオクライトの學說に就いて詳細な認識をうる事ができないし、經濟概論中その學說を取扱つた短い敘

述では、それらの敘述の各々を關係づけるべき觀念を發見しえないままに、ただ數々の遺説に出あうのみであると。この不公平は尤である」云々。Œuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay, 1888, P. XI (Introduction par A. Oncken) 島津・菱山譯、ケネー全集、第一卷、六頁

(3) この學說のもつあらゆる矛盾的性格については、異なつた立場からではあるが、たとえば次の人々によつて感得されたように思われる。

F. List, Das nationale System der politischen Oekonomie, 1841: Sammlung sozialwissenschaftlicher Meister, herausgegeben von H. Wenzig, 1922, SS. 450—454, 谷口・正木譯、『國民經濟學叢書』四二—四一五頁

K. Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte, 1844: Marx/Engels Gesamtausgabe, erste Abt., Bd. 3, SS. 109—110, マ・エン全集(改造社版)、二十七卷、二七六—二七九頁

——, Theorien über den Mehrwert, herausgegeben von K. Kautsky, Teil I, 1905, SS. 50—60. 向坂譯、『剩餘價值學說史』(黃土社版)第一卷、四二—四六頁

H. Tuckey, Le libéralisme économique dans les oeuvres de Quesnay, *Revue d'économie politique*, Tome 13 (1899), P. 960.
S. Jourdan, Isaac de Bascalan et les idées libre-échangistes en France, *Revue d'économie politique*, Tome 17 (1903), PP. 613—614.

二 研究史の概要と問題の所在

周知のごとく、オンケンによる學派の始祖ケネーに關する包括的な著作集の公刊(一八八八)は、フィジオクラート研究に對して促進劑的な役割をはたした。それと共に十九世紀の、いわば特殊的研究——デール版前後の——のあとをうけて、體系の綜合的把握の試みが二十世紀の研究テーマとして浮んだ。フィジオクラートの哲學的・世界觀的把握の一成果としてのハスバツハの系統に一脈通じた、オンケンが、自ら編纂した廣般な資料を驅使する

ことによつて、名著『經濟學史』に展開した研究は、疑いもなく二十世紀初頭における研究史上の劃期をなす。それは、大體において、體系把握の基礎を、自然法的背景に、すなわち世界觀乃至社會哲學的意味をになうとされた自然的秩序＝實定的秩序の二元的對抗概念に、求めたといえよう。

(1) *Oeuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay*, publiées par A. Oncken, Frankfurt/Paris, 1888.

(2) E. Daire, *Physiocrates* (Quesnay, Duport de Nemours, Mercier de la Rivière, l'abbé Baudeau, Le Trosne), *Collections des principaux économistes*, Tome 2, 1846.

(3) W. Hasebach, *Die allgemeinen philosophischen Grundlagen der von F. Quesnay und A. Smith begründeten politischen Ökonomie, 1690—*, *Les fondements philosophiques de l'économie politique de Quesnay et Smith*, *Revue d'économie politique*, Tome 7 (1893)

(4) もとよりオンケンは、社會史的意味づけを全く等閑視したわけではない。現にかれは「社會史的意味において、フィジョラート學說は農村の第三身分の擁護學說として特徴づけられるであろう」(Oncken, op. cit., S. 342) といへた。しかし、そこ(1) (op. cit., SS. 341—342) 展開された所説はかれの著作全體の構成意圖からすれば、二義的意義をもたされているように思われる。

フランスにおいては、十九世紀の、どちらかといえば散發的な個別的研究所の域を脱して、二十世紀にはいると資料的・傳紀的かつモノグラフィックな研究とともに——チュルシーに端を發して S・ジウルダン、デニボワをめぐつて展開された論争²⁾ (それは、十九世紀末期から二十世紀初頭にかけてフランスで再燃した自由貿易か保護貿易かという現實の課題に觸發された・ケネーの經濟的自由主義の性格づけの問題であつた) をみる。この論争のもつ重要な研究史的意義の一つは、それが體系把握の問題、すなわち體系構成論へ——少くとも體系把握の基礎の問題へ——と深められる上でのかけ橋をなす點にあつたように思われる。概していえば、フィジョラート

學說を道德哲學の繼承的綜合とみるデューボワは、體系構成の基礎を『自然權』思想に求め、チュルシーとジウルダンとは、むしろそれを實際的な現實的利害に求めた。この後者の構成的基調は、未だナイーヴな形であつたといへ、間接にハスバツハやオンケンのように對立するものといえよう。これらの成果は「論理的には、社會哲學の理論が……學說の結論とともに前提をなす。しかし歴史的には、それはプリミティヴな原理〔現實的基礎に據つた經濟論のこと〕の派生的な發展である」というウーレルス——フランスにおけるフィジオクラット研究の代表的水準を示した——の二源泉の把握によつて、一應の結末をとげたように思われる。

(補論)

* ここでは、研究史自體の系譜という點に着目して、十九世紀の主要研究文獻の所説をごく概略的に要約し、それがいかに二十世紀の研究課題へと收斂されていつたかを略述する。

Blancq, Histoire de l'économie politique en Europe: économistes et publicistes contemporains, 5e éd., 1882 (1^{re} éd., 1837) PP. 315—328.

ブランキーは、そこで「ケネーは殆んどものを書かなかつた。書いたとしても、それは大抵格言風で不分明な仕方だなされた」(Ibid., P. 323)というような單純な誤りをおかした。しかし、研究史上で注目すべきは次の二點であろう。その第一は、學派の生成の現實的基盤をジョン・ロー(J. Law)の體制の崩壊に求めた(Ibid., PP. 315—316)こと——これはマルクスの『剩餘價值學說史』において肯定的な句調で引用された——であり、その第二は、エコノミストの政策的基調を「專制主義にかなり近い後見的權威『cautaire tutéaire』の支配の基礎づけるために、社會理論を創設すること」(Ibid., P. 323)に求め、「かれらは、あらゆるものの根源と思われた土地所有を不動の基礎のうに設定しようとした」(Ibid., P. 323)と述べた點である。

E. Daire, op. cit.

「デール版のケネーにおいて「ケネー解釋における」古典的表現『Klassischen Ausdruck』をみた」(C. Menck-Tihauer,

op. cit., Einleitung, S. 1) といわれるデールの解釋のうち、研究史上注目すべきと思われるのは、次の諸點であろう。その第一は、フイジオクラートの體系が「正義と不正義の不動の原則たる自然權の原理に其礎づけられ」(ibid., 2e partie, PP. 437, 443) それによつて社會的モラルがうちたてられた(ibid., 1er partie, P. LXXXIV) としてゐる——ケネーの弟子の解釋に即した——こと、第二は、自然權の規範的、具象化としての自由貿易の性格づけ(ibid., 1er partie, P. 12, 2e partie, P. 443)——この問題は二十世紀初頭フランスで再燃したが、いまなお未解決な——であり、第三は、「絶對王制の意識的な辯護論」(ibid., 3e partie, P. 437) としての政治論の性格づけの問題である。

A. Toqueville, *L'Ancien régime et la Révolution*, 7e éd., 1866 (1er éd., 1856)

トクヴィルが問題にしたのは、概して革命への關聯におけるフイジオクラートの政治論であつて、それは「六十年この方……極めて悲惨な革命に伴われた自由政府〔共和制〕の無益な試み、……勢多く不妊的な努力に失望した」(ibid., PP. 246—247) トクヴィル——第二帝政の政治的環境に制約された——の特徴的な把握である。そこで問題として残るのは次の諸點のように思われる。その第一は、エコノミストにおいては「國家の絶對權力を破壊するのではなくて、それを改革することが問題にされる」とし、且つ「社會改革のために行政手段を期待したのみならず」かれらの國家は、絶對權能を附與された強力國家であつた(ibid., PP. 239—240) とする、國家觀であり、第二は「エコノミストの自由主義の性格づけである。すなわち、かれによれば、エコノミストの自由は經濟面に止り、政治面には及ばず、他方において「社會的行政的改革を構想した」點において、革命への直接的な先驅者——フイロソフの抽象性に比べて具體性をもつ——となるとされる。(ibid., PP. 235—236, 238, 239) つまり、かれは、エコノミストの理論をもつて、開明化された中央集權的國家の絶對權力による國家主義的な行政的社會改革論と特徴づけたのである。この點は、後にシェニエニスによつて異議をとなえられる機縁をなした。L. Chénisse, *Les idées politiques des Physiocrates*, 1914, PP. 56—58, 參照。

L. de Lavergne, *Les économistes français du dix huitième siècle*, 1870, cf. PP. 58—111, 167—218.

明確な方法的視角をもつとはいえないまでも、とにかく、デール版に依據してフイジオクラートを中心的に把握した最初の著作集である。その學說をもつて「商業の完全なる自由を原則とする」(ibid., P. 38) ものとみなし、かつフイジオクラートをもつて政體の變革の如何に拘わらず不變的に現存する「人權」の確立者とする(ibid., P. 76) 點、ならびに政治論を經濟論

の附加物とする素朴な體系構成論 (*Ibid.*, P. 75) は、ともにデールの解釋に基づくものと思われるが、——ケネー學說のとりえ方において——次の斷片的な指摘は考慮すべきものがある。その第一は、『原則第一』(政治原則)に關するものである。すなわち「ここでは、王權が絶對的な……一七六〇年に述べられた言葉だということを忘れてはならぬ。その場合に何らかの政治的自由の制度を要求することは不可能を強いるものと思われた。ケネーはバルマンの無能ぶりと盲目的な驕ぎをまのあたりに見ていたし、ルイ十五世が三部會を嫌惡していたことも知っていた。そこで、ケネーとしてはその理想とするところを實現するには、いさおい絶對權力をかるより他に手がなかつた」(*Ibid.*, P. 71)「傍點筆者」という指摘であり、第二に、『不妊の階級』という名稱のもつ政策的効果の問題である。すなわち「獨占・禁止・保護關稅という一連の制度によつて、コルベールは、商・工業の利益に奉仕した。この不妊的という言葉は、もとより誤つた原則ではあるが、その當時としては大いに眞實性をもつていた。というのは、その語が殆んど生産せずに、破壊をもたらすばかりの特權的産業に適用されたからである」(*Ibid.*, P. 69)と示唆的にいう。その他、かれの『經濟表』の過少評價 (*Ibid.*, PP. 67—68) やそのおかしな素朴な誤謬 (*Ibid.*, P. 66) については、あつた。

H. Taine, *Les origines de la France contemporaine, l'Ancien régime*, Tome 2^e, PP. 65—75, 144—149

ここで考慮に値すると思われるのは次の一點である。テーマは、トクヴィル、ラヴェルニエの基調を發展させて次のようにいう「既にすつと以前から、國家は中央集權制度によつて、國中に支配の網をはつていた。……事實、王はその代理人の手を通じて政務を一身に掌握し、その親書と恩典とによつて私事にまで干渉した。……抜本的な改革を一舉に行うためには、この機構を利用するにしくはない。かかる理由からして、エノキムストは中央權力を制限するどころか、却つてそれをひろげようとした。かれらは、その權力に新たな障礙を對抗させるかわりに、それ「權力」を當時なお阻んでいた古い障礙の殘滓を破壊しようと考えた」(*Ibid.*, PP. 67—68)「傍點筆者」と。この指摘はなお問題を含んでいるが、一應示唆的である。

Y. Guyot, *Quesnay et la Physiocratie*, 1896.

F. Passy, *Discours prononcé le 23 août 1896 à l'inauguration du monument de Quesnay à Méry*, *Journal des économistes*, XXVII, 1896.

この兩著作は「チュルシーをめぐる論争」(本文参照)への道を開いたということを指摘しておく。チュルシーが「フィジオ

クラートは好んで經濟的自由主義の先驅者とみなされる。現代の自由貿易學派の代表者達も、がれらをその先覺者とよんでいる。けれども、この提案は……餘りにも絶對化しすぎて間違っているきらいがある」(H. Trench, op. cit., p. 225)といつて論を進めるにあたつて、問題にされていたのは、右の兩著作であつた。

以上、いまだ個別的・斷片的研究の域を脱しないフランスのフイジオクラート研究史のもつ十九世紀的遺産を、端的に要約すれば次の三點につきる。第一、フイジオクラートをもつて完全な自由貿易論者とみなし、且つその學說のもつ經濟的自由主義は、ケネーの弟子の解釋に忠實に、自然權的思想的背景に基礎づけられた(その「古典的表現」をE・デールにみる)。第二、政治改革の基調には政治・國家論の絶對主義的傾向(デールの指摘に始まり、トクヴィル、テームに典型的表現をえた)がみられるとし、第三、政治經濟論の關係を論じた素朴的な體系構成論(なお斷片的に止るも、デール、ラヴェルニユにみられる)。

みぎの第一點は、チュルシーの論文によつて波紋を投ぜられ、ケネーの自由貿易論の性格づけから體系構成の基礎の問題へと進み、第二點は、シェイニースの前掲著作によつて問題にされ、これらの諸點をも媒介しつつ第三點はオンケンの包括的な體系構成の試みへと發展する。この夫々がある意味で二十世紀ヨーロッパのフイジオクラート研究のテーマをなすといえよう。當時イギリスでの唯一の専門的研究書たるH・ヒグズの著作(H. Higgs, *The Physiocrats, six lectures on the French economists of the 18th century, 1897*)²⁵、かれ自序文で述べたように(*Ibid.*, Preface, p. vi)「『まだ』一冊も英語で書かれたことのない主題について、有用な手引きを與える」ことを目的とした、文獻史的入門書——ロンドン・スクールの講義案——であつた。

(1) 資料的な文獻としては次の著作がある。

L'article "Hommes" de F. Quesnay, publié par E. Bauer *Revue d'histoire des doctrines économiques et sociales*, 1^{er} année, 1908, pp. 3—88.

"Inopéris" par Quesnay, article inédit, avec notes de Turgot, édité par G. Schelle, *ibid.*, 1908, pp. 137—186.

G. Wertheise, *Les manuscrits économiques de Quesnay et du marquis de Mirabeau aux Archives Nationales*, 1910.

"Bref état des moyens pour la restauration de l'autorité du roi et de ses finances" par le marquis de Mirabeau avec des

notes de F. Quesnay, publié par G. Weulersse: *Revue d'histoire économique et sociale*, 6^e année, 1913, PP. 177—211.

傳記稿がフレイタースの参考文献としては次のように著作がある。

H. Ripert, Le marquis de Mirabeau, ses théories politiques et économiques, 1901; G. Schelle, Quesnay avant d'être économiste, *Revue d'économie politique*, 18^e année, 1904, PP. 177—212; G. Schelle, Le docteur Quesnay, 1907;

J. Mille, Un physiocrate oublié, Le Trosne, 1905; L. Brocard, Les doctrines économiques et sociales du Marquis de Mirabeau dans l'Ami des Hommes, 1902. etc.; [十九世紀に属するがこの種の歴史文獻として] G. Schelle, Du pont de Nemours et l'école physiocratique, 1888. など。

(3) H. Truchy, op. cit., PP. 925—954; S. Jourdan, op. cit., PP. 589—615, 698—708; A. Dubois, Quesnay anti-mercantiliste et libre-échangiste, *Revue d'économie politique*, 18^e année, 1904, PP. 213—229.

(3) Cf., A. Dubois, L'évolution de la notion de droit naturel antérieurement aux physiocrates, *Revue d'histoire des doctrines économique et sociales*, 1^{er} année, 1908, P. P. 245.

(4) Cf., A. Dubois, Quesnay anti-mercantiliste et libre-échangiste, op. cit., PP. 223, 224.

(5) Cf., H. Truchy, op. cit., PP. 928—929, 953—954, 941; S. Jourdan, op. cit., PP. 610—611.

(6) G. Weulersse, Les physiocrates, *Encyclopédie scientifique*, 1931, P. 300. それはいつても、ケートルはフレイタースの學說が「何よりもまず經濟學說である」ことを認めた。「フレイタース思想の進化の終點を研究したとしても、それによつて……單純な事實の檢證から生じた客觀的な證明の價値に何らの變化も生じないであらう」ともいつている。なほ學派運動の跡を詳細に追究すると共に思想の展開過程をあとづけようとする試みは、次の諸著作にみられる。

Le mouvement physiocratique en France (de 1756 à 1770), 2 vol, 1910; Les physiocrates, 1931, PP. 1—55; Le mouvement préphysiocratique en France (1748—1755), *Revue d'histoire économique et sociale*, XIX^e année, 1931, PP. 244—272; Les physiocrates sous le ministère Turgot, 1925.

(7) フレイタースの體系構成論の試み(表・米における)として、なお次の二著作をあげる事ができる。

N. J. Ware, The physiocrats: a study in economic rationalization, *The American Economic Review*, Vol. XXI, 1931,

No. 4, pp. 607—619;

M. Iker, A Inquiry into Physiocracy, 1939.

ここでは、『經濟表』そのものの研究「その参考文献については、越村信三郎著、ケネー經濟表研究、一九四七、附録參照」は除外された。なお、わが國における貴重な諸研究にふれていないが、その中でフィジオクラートの包括的な専門的研究として次の著作をあげなければならぬ。

久保田明光、近世經濟學の生成過程、一九四二、八四—三二四頁。

——、フィジオクラシー、新經濟學全集、五、一九四〇。

さらに、從來意外にも等閑視されてきたかみえるフィジオクラートの財政論に關する思想史的研究として、島恭彦、近世租税思想史（一九七頁以降）がある。

フィジオクラートの研究史並びに参考文献に關しては、坂田太郎、重農主義、經濟學研究の葉（經濟學說史篇）、三九—七八頁、横山正彦、フランソワ・ケネー研究序説、經濟學論集、第十九卷第二號、一一四五頁を參照。

近世經濟學が道德的・政治哲學の殻をやぶつて生れようとするとき、その生成しつつある體系の構成的基礎を追求する試みは、一應研究史の視角をはなれてみても、學說史ないし思想史の中心問題の一つであることを失わない。私は、その問題に、西歐世界を基軸とした廣い國際經濟圈に位置づけられたフランスの特殊な社會經濟的基礎に留意しつつ、政策的視角から、——まずケネー學說の體系構成論に研究視點をしばりつつ——せまつてみようと思う。フィジオクラート研究における現代的課題の一つは、かかる意味でのその體系構成論の問題にあると思われる。それは、——一般にある學說のもつ個別理論を論ずるには、その學說に對する何らかの體系的ヴァイジョンを把持することが先決條件であるという理由からのみではなく——特にケネー學說のごとく、その原資料のもつ特殊性からみて不可避的な第一次的研究階梯なのであるが、みぎの課題性と研究視角からして、當然、古典學派との對比的・發展的考察にもとづく包括的把握をもつて補われねばならないであらう。

(1) 方法的視角から典型的なものを従来のフイジオクラート關係文獻のなかで類型づけるならば、第一に、社會哲學の内容規定に構成的基礎を求めるハヌスマン——若干の留保をふしてオンケン——の前掲著作、第二に、一般に理論自體の內面的構成を基軸として一つのイデオロギーないし狹義の方法の展開を追求するもの、所謂《dogmenhistorischen Untersuchung》の典型として考へらるるシュタムパーの著書（J. Schumpeter, *Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte*, II. Die Entdeckung des wirtschaftlichen Kreislaufs, *Grundriss der sozialökonomik*, 1924, SS. 39—63. 中山・東畑譯（一九五〇・五九—一〇七頁））をあげる事ができる。それらは多産的な成果をもたらしたとはいへ、フイジオクラートのもの、現實にたいする鋭い政策の内容規定だとか、その實質的（歴史的）性格の追求だとかは、當然これらの關心をより多くひかなかつたのである。ここに、社會經濟的基礎に留意するとは、生成期の理論家の政策的意慾を觸發し、かれらの政策的決斷をせまつた、政策的ミリュを——その政策的視野に投影されたものを手掛りとして——考慮するの意味である。

(2) 戦後のフイジオクラート研究（英・米）には私の知るかぎり次の著作がある。

Joseph J. Spengler, *The Physiocrats and Say's Law of markets, The Journal of political economy*, Vol. LIII, Sept. 1945, No. 3, pp. 193—211.

R. L. Meek, *Physiocracy and Classicism in Britain, The Economic Journal*, March 1951, pp. 26—47.

——, *Physiocracy and the Early Theories of Under-Consumption, Economica*, August 1951, pp. 229—269.

〔本篇は、一九五一年度科學研究費交付金による『資本主義確立期における各國經濟および思想の比較研究』の第二班フランス班として行つた研究の中間報告である。〕